

経営、強迫性、欲望、そして解釈

イアン・パーカー

(新宮一成訳)

ラカンへの興味深い導入の書を著した新宮一成(2004)は、その中で、自分の精神分析の研究対象が、かなり早い時期に、イギリスのクライニアンの伝統から、フランスのラカンの精神分析に移ったと語っている。それ以降、彼の研究はとりわけ、日本仏教との関連においてラカンを詳細に読み解くことに向けられてきた。この仕事は、現代社会の仕組みと、人間主体がその中でどのように適応しやりくりしてゆくのかという問題についての考察へと道を拓いた。この仕事を送り出しながら、彼は、ラカン(1901/2007)によって「大学の語

らい」と呼ばれたものに滑り込んでしまう危険に抗しつつ、自らが勤めを果たす場である大学の経営構造との間で、折り合いをつけることを怠るわけにはいかなかった。筆者のこの論文は、新宮一成の人と仕事をめぐるこれらの諸要素に触発されて書かれる。お読みになってお分かりになるであろうが、筆者はラカンの『セミネール第六巻 欲望とその解釈』の読

解を通じて、適応と経営の問題に考察を振り向けることにした。このセミネールにおいて、ラカンはクライン理論と対象関係論とを組上に上げながら、欲望と解釈というテーマを論じている。欲望と解釈とは、精神分析の二つの鍵といふべきものたちであって、それを使つて我々は権力の留め金を外し、真理を口にする空間を啓くことができるのである。

精神分析の仕事は解釈の仕事である。しかしその解釈は、一般的に広がった治療的な語らいを駆動しているものとは、質の違った解釈である。このことは、精神分析の仕事が、フィルターを掛けて引き留めるようなフレームを構築し、また構築し直すことによって条件づけられているということを意味する。このフレームはまた、まさにその引き留めるという作用を通じてこそ、欲望に関してどんな言うべきことがあるのか、そして誰がそれを言うのかを知ろうとする欲望を、掻き立てるといふよりもむしろ招き寄せるのである。精神分析は

いったい何をするものなのかということについて、我々は読み、読み直すというプロセスに従事することを怠めることはできない。本論文では、精神分析を組織に関する研究に用いることについての一般的な問題 (Fotaki et al., 2012) から、組織というもののへのはつきりした接近法としてのジャック・ラカンの仕事をめぐる特定の問い (Driver, 2013) へと移り、そのちにさらに特異的に、ラカンの『セミネール第六巻』(1958-1959) に焦点を当てることにする。

ラカンはこのセミネールの中で我々に、「近代的な」(これは彼の言い方であるが) 現代社会の性質については、このような読解を喚起するような何か特別なものがあるということを示し、また同じく、欲望そのものは我々にとって、今日では特別な仕方では解釈されるべく構築されているとしている。そこでラカンは、彼が扱う精神分析的諸現象の歴史的性質を我々に想い出させてみせる。たとえば彼は、エディプスとハムレットをそれぞれ人間主体として成り立たせていたのは「二つの時を隔てた文明」であって、それぞれに「心の生活の違い」があるというフロイト (1900, p. 264) の評言を引っ張ってきいている (Lacan, 1938-1959: 4 March 1959)。そして彼は、欲望の構造化というところに重きを置き、たとえば次のような根本的な違いに注意を向けさせる。欲望の「現出」を、あたかも欲望が言語活動の水面の下にあぶくと共に沈んでいてそこにつねにすであつたかのように描き出すのと、ファンタジーの組織化における彼の言うところの「平衡失調」が主体を冒していると捉えるのとは違うのである

(Lacan, 1938-1959: 15 April 1959)。

『セミネール第六巻』は、対象関係論へのラカンの批判を総括したものとなっている。対象関係論は『セミネール第四巻 対象関係とフロイト的構造』(Lacan, 1956-1957) の焦点であり、『セミネール第五巻 無意識の形成物』(Lacan, 1957-1958) において彼の講述の下敷きとして存在していた理論であった。この第六巻では、ラカンは、当時の対象関係論が、精神分析の「英国的伝統」として知られるようになったものの支配的な接近法として働くようになったこと、またさらにアメリカの「自我心理学」(White, 2006) が提起した問題を繰り返して、むしろ深めさせたことに注意を促している。しかしながら、彼がエラ・シャープ (1937) の仕事に関して議論を展開しながら強調しているのは、「対象関係」とは何なのかということをめぐる矛盾や解釈の違いについてである。エラ・シャープが採り上げられているのは、彼女がアンナ・フロイト (1936) よりもメラニー・クライン (1986) の仕事に近かったからである。最近の精神的な評価をみても、これを理由としてシャープの貢献に対して好意的な見方がなされてきている (Guéguen, 2007)。セミネールがなされた一九五八年から一九五九年という年は、フランスの精神分析の諸団体が、国際精神分析協会 (IPA) による公認をめぐって交渉を活発化させ、政治的・組織的な緊張が高まっていた時期に当たる。この公認の問題はセミネールの五年前から始まっていたが、IPAの調査委員会が結論を出してその決着を見たのはやっと一九六三年になってからであった。そして

この調査委員会の中には、ロンドンに本拠を置いた著名な対象関係論的分析家たちが含まれていたのである (Marini, 1992; Roudinesco, 1990)。

これらの三冊のセミネールには、まだ公式の英訳がない。『セミネール第六巻』に含まれるハムレットについての七回の講義は、シャープによる指摘がそのきっかけとなっているのであるが、それらはラカンの死後、雑誌『Ornicar?』に掲載されただけである。『セミネール第六巻』のフランス語公式版は、近年やっと出版されたばかりである (Lacan, 2013)。ハムレットについての講義のうち三回分だけは、臨床的・精神分析的枠組みではなくむしろ文学的・理論的枠組みにおいて、雑誌『Yale French Studies』にて翻訳が掲載された (Lacan, 1977)。これはたしかにたいへん早い時期のものであったが、ラカンがこのとき気にかけていた問題が、理論装置としての対象関係論であったということは、当時の読者にとつては見通し難いままであった (Rabaté, 2001)。本論文では、この『セミネール第六巻』へのいくつかの参照を行ってそれらを投錨点とすることで論を進めることにするが、それはラカンの複数のセミネールの進行の中での議論の変遷が、あたかも一つの均質な全体を成すかのように積み上げられ纏められると主張するものではない。本論文における『セミネール第六巻』からの引用は、ダブリンのコルマック・ガラガー (Comac Gallagher) による「私家版」に拠り(必要な場合は小さな修正を施し)、参照箇所はラカンの講義の日付で示した。頁番号のほうは、ガラガーが自らのウェブサイト版 (Lacan,

1958-1959) で翻訳を定期的にアップデートするのに連れて、その細部がずれるためである。

精神分析は、注文と仲介の両方に関わる理論であり実践である。というのは、我々が欲望と解釈の問題に近づいてゆくとき、我々は欲望と解釈というこの組み合わせを、注文と仲介の上にマッピングしているとも言えるからである。そしてこのやり方では、欲望は注文に対応させられ、解釈は仲介に対応させられる。そしてこのようにマッピングすることは大切である。ただ解釈というものが、一種の格子のようなものであって、それが話の仕方を枠にはめるような注文を出すというふうに思念されるわけではないし、欲望が仲介の原動力であると考えられるわけでもない。むしろ、ラカンの伝統における精神分析においては、欲望は注文されるものであり、仲介はそれ自体が変形作用をもつものだということが強調されるのである(さらに、この定式化の中には、セミネールの中のいくつかの点でラカンが発言しているように、マルキシズムへの慎重な言及がある)。

欲望とは、個々人の存在の中で拍動し、ずっと拍動してきた何ものである、と仮定してみることに、また、解釈は、その欲望に対しての、より歴史的に変容を蒙った応答であると仮定してみることは易しい。これは精神分析に引き摺られた常識のあり方に沿ったものであるゆえなおさら易しいであろう。このような精神分析への見かけ上のメタ反省は、無意識的にはあれ、我々にとつて普遍的に真であるものとしての精神分析の繰り返しに過ぎず、精神分析の実践のみならず、

その実践が作用している実体の歴史的偶然性にさらされた本質に対して、公平な見方をしているとは言えない。そうではなく、解釈は、完全にはないにせよ、相対的には不易のものであって、今の我々にとつての個別的な仕方で構造化されているのは、欲望のほうであると述べるほうが、無意識の発明、そして精神分析自体の発明の影響力を、おそらくよりよく捉えることになる。ラカンは一方において、「欲望は、主体性の中の固定した座標との関係においてしか考えられず、位置づけることもできない」(Lacan, 1958 - 1959: 15 April 1959)と述べており、私はこのラカンの言葉を、以上のような意味に読解しているのである。その座標というのはその当時、近代的主体あるいは精神分析主体にとって個別的な流儀で固定されていたものである。私はこのラカンの主張を、彼の次のような主張と並べて読解している。いわく「精神分析や精神分析家が存在する前、人間たちは問いを立て、已むことなくその問いを立て続けていた。それは、自分たちの真の意志が、どこにあるのかという問いであった」(Lacan, 1958 - 1959: 18 March 1959)。

しかしながら、ここで実際に問題になっているのは、欲望と解釈の間の関係、あるいは前者と後者の間の分離と接合である。この分離と接合が問題になることで、「解釈」は、歴史的な意味を持った媒介的過程としての「欲望」に対して作用するようにするのである。この過程はファンタジーによる構造化を受けているので、我々はそちらに目を向ける必要が出てくる。我々が自己理解の形を作って行く道のりや、政治

経済システムを特徴づける疎外の諸形式、すなわち資本主義とか、資本主義が自らの発展に対して軛として据え付ける妙に強迫的な科学的自己点検といった諸形式に意味を与えるのは、この分離と接合である。精神分析の語らいそのものにとつての可能性の条件もこの疎外によって提供されているのである。ラカンが次のように論じるのは、こうしたことによるのだと考えられる。「彼〔近代人〕が、至高とでも言うべき程度にまでひとつの『われ在り』であるのは、彼が〔デカルトの〕言説の切れ目に存在している限りにおいてのことである」(Lacan, 1958 - 1959: 24 June 1959)。やはりまた同じ理由から、ラカンはセミネールの最初の回で、彼の「工場の隠喻」を我々に想い出させる。この隠喻によつて、我々は「そもそもエネルギーという概念が存続できるためには、象徴界と現実界が何らかのつなぎ目を持っていることが必要である」(Lacan, 1958 - 1959: 12 November 1958) というこの意味を吟味してみることが可能になる。この工場の隠喻を辿つてゆくことによつて、想像界の位置に関する問いが開かれる。想像界を通して、我々は象徴界と現実界のつなぎ目を、我々自身や他の人々に向けて説明する。この問題に関しては、まもなく経営とその居心地悪さを論じる時に立ち返ることにしよう。

適応 Adaptation

ラカンがセミネールの終わりのほうで我々に思い起こさせているように、対象関係論的アプローチは、「分析における

進歩というものについて我々が持っている考え方の全体を支配しようとして」(Lacan, 1958-1959: 1 July, 1959) やって来たというところがある。そのため、記述をしていてもそれは間髪を入れず処方箋のようなものと滑って行ってしまう。この「分析における進歩」というものは、個人の分析において進歩というものをどう捉えるか、あるいは分析を受ける人が治療の中でどのような方向に導かれるのかという点に関わっている。事実ラカン (1958) も、『セミネル第六巻』に先だってそのことに言及している。しかしそれだけではなくて、世の中には現実とは何であるか、またどんなものでなければならぬかを自分は知っているから、それに適応できるように精神分析で人々を助けてあげられると囁く人たちがいて、そういう人たちによって精神分析の中に密輸入されてきた進歩概念も、ここに関わってくる。かてて加えて、この「分析における進歩」という言い回しは、社会的分野における進歩概念に属していると読み取るべきでもあって、そうすると精神分析は政治性のあるプロジェクトに首根っこを掴まれ、政治的プロジェクトそのものとして機能してしまいうさである。

治療に関しては、ラカンは「道徳主義的な規範化と呼べるような路線に沿って」(Lacan, 1958-1959: 1 July 1959) 進められていると見える分析に対して、口を極めて反論している。精神分析がもしその仕事を、自分たちが手に入れていると想定している「現実への参照」(ibid.) によって組み立てれば、そして精神分析主体がその対象との関係をどのように整えれ

ばよいのかを知っているのは、この自分たちだと思ひ込んでしまえば、彼らは「同一化風の結論」(ibid.) に導かれて分析主体をも、そちらのほうへと導いてしまうことになるだろう。主体が善なるものになるために守らなければならない規則の体系としての道徳は、倫理とは別物である。この違いはむしろ、次のセミネルにおいてラカン (1966) によって取り上げられることになる。「道徳主義的な規範化」でもって分析家の同一化している道徳基準の列に分析主体が引き入れられてしまうということへの警鐘は、第一には、主体が精神分析家と共有している空間に存する諸対象に関係してゆくものとして考えられているその世界、つまり分析における進歩の結果、分析が終わる頃にはそこに加わることを奨励されている、見るからに善き世界に、当てはまるわけだが、また第二には、内的対象の布置として組織されている私的な領域に閉じ込められているものとして主体が捉えられているような世界、つまり主体がそこから生きて脱出できることを望むしかないような、そういう悪い世界にもまた、当てはまるものである。

ラカンは、世界の中に置かれた主体について、上記の第一の精神分析的ヴィジョンを扱ったわけで、このヴィジョンは今では関係的かつ相互主観的な精神分析という衣を纏っている (Loewenthal and Samuels, 2014)。彼はまた、上記の第二のヴィジョンにも言い及んでいる。それは当時では、エドワード・グラバーのような、古き良き時代のクライニアンたちによって表明されていたものである。そこにラカンは挑みか

かったのである。たとえば、グラバーからのなかなか素敵な引用によれば、パラノイア的な子どもの宇宙においては「外界は、肉屋と、砲火の下の方衆便所と、遺体安置所と一緒になったようなものとして表象されている」(Glover, 1956, p. 222)。そしてその宇宙の組み合わせを色々に変えてみてもよいというわけである。たとえばグラバーの議論では、「藥物中毒者は、この宇宙を、より安心させてくれ陶酔を与えてくれる化学者の店へと転換してしまう。ただしその店の毒物を入れた戸棚には、鍵が掛つていないのである」(ibid.)。

肝要な点は、次のようになろう。よしんば、世界に適応しないことは狂気であると言えるほどに世界が間然するところなく秩序立てられていると考えようが、あるいは、世界は大変不確かなものである、個々人の個別のファンタジーを、皆がばらばらになつてしまつたりしないように他人との間で整えてゆかねばならないと考えようが、ラカンが主張するように、我々は、そのような社会や自己の健全な統一体というようなものに對しては、眉に唾してかからなければならぬということである。ラカンは実際、永続的に分割されてしまつてゐる主体という、メラニー・クラインによるヴィジョンに對して、一般に考えられているよりも共感的である。クラインのこのヴィジョンは、時に誤つて、対象関係論の流れの中にひっくりめられてしまつてゐるのだが。それゆゑ彼は、ある種の精神分析家たちの間に見られる、乳児はかつて完全に母親と調和した存在であつたとするような、はじめから完全に適応的に作られたファンタジーを唾棄する。彼によれば、

「事實はこうなのだ。人間存在にあつては、その全体性なる経験に近づけるような可能性はないのである」(Lacan, 1958-1959: 11 February 1959)。欲望とは、「人間の発達という結局のところ調和的で樂觀的な觀念が仮定したがるようには、世界の見取り図とのあらかじめの和合のもとに纏められたものではないのだ」(Lacan, 1958-1959: 13 May 1959)。

同時にラカンは、「道德主義的な規範化」の裏面を視野に入れておくことを忘れない。すなわち、母との間で初めに経験されていたのと同じような関係を将来にわたつて築く方向へと主体をもつてゆこうとすること(まさに対象関係論において想定されているような)がこの「規範化」の一側面であるが、その裏面のことである。それは、乳児は全能のファンタジーに駆り立てられているのであるから、治療を完結させようと思へばこの乳児が自らのそうしたファンタジーに氣づかなければならぬとするものである。これは、クラインの仕事において、妄想分裂態勢から抑うつ態勢へと進められる理想的で典型的な旅路であり、それはまた、エラ・シャープによる、ラカンの議論するところとなつたあの小さな咳をする男性患者の分析を支えているものでもある。ここでラカンは、シャープが精神分析とチェスとの間に立てた比較検討を手掛かりとして、この分析主体は自分の女王様をお守り申し上げていて、「全能感が存在しているのは、むしろ女性の側においてである」という論点を提示するのである(Lacan, 1958-1959: 11 February 1959)。そしてこの論点は、語り

得ないけれども語らねばならない権能を有しているのは誰なのか、というより広い問題の中に埋め込まれてゆく。クライン派の人々にとっては、「権能に満ち溢れているのは主体」であるらしいのだが、実はそうではなく、ラカンが論ずるところでは、「権能に溢れているのは、他者である」(ibid.)。

ここでは、理論的な賭け金はぜひぶん高まってくる。象徴的去勢を拒み、かくして己の女王様をその場に保持しようとする主体、すなわち「他者の去勢を拒む」(Lacan, 1958 - 1959: 4 March 1959) 主体にとつての賭け金である。ラカンが、強迫神経症者の条件として描き出すのは、他者とのこのような関係、すなわち他者に全能性を帰することである。強迫神経症者にとつてはかくして「欲望がそのまま防衛」(Lacan, 1958 - 1959: 10 June 1959) となり、彼は「手柄を立てること」に汲々として時を過すのである (ibid.)。「何にとつての手柄なのかといえば、それは彼の欲望に照らしての他者への尊崇にとつての手柄」(ibid.) である。こういった主体は、ラカンの言う「支配への隷属」(ibid: 17 June 1959) の中で生き延びている。強迫神経症者は、主流派の最たるものとは言えないとしても、資本主義の最も忠実で適応的な主体であり、組織の現代的形態を分析しようとするれば、必ず重要な要素となってくるものである。

自分が従属している秩序の形式をその場に据えようとするこうした強迫者の配慮は、一時期影響力があつてラカンもその守護者に祀り上げられていた資本主義についての構造主義的説明によって補完される。マルクス主義の理論家であるル

イ・アルチュセールの仕事は、適応を批判的に扱ったものと考えられているが、適応という問題を中心に取り上げている。アルチュセールは、すでに一九四五年に、ラカンが高等師範学校で論理の時間 (Lacan, 1946) の発表をしたときに出席してはいたがそれほど印象付けられはしなかった。彼はイデオロギーの機能を記述するためにその源泉としてラカンの仕事を使用した。その説明によれば、イデオロギーは無意識ともども、永遠であると見なされるのである。しかしそれだけでなく、アルチュセール (1970) は、国家のイデオロギー装置が主体を喚問し、それによってこれらの組織の支配形態を保証してゆくという円環を打ち破る試みには、無関心であつたように見える。これは彼がその左翼の批評家からは秩序の哲学者 (Rancière, 1974) として言及される理由である。

主体の喚問と適応という過程における精神分析の位置に関しては、指摘しておくべきもう一つの側面がある。そしてアルチュセールが記述と処方とを区別することが出来なかったということは、彼自身の特殊なマルクス主義理解(それは世界を解釈することと世界を変えることを融合させるはずのものになる)において生じている問題の根の深さを物語る。この問題はロベール・カステル (1973) のいわゆる「精神分析主義」の研究によつてはつきり指摘されている。精神分析主義というのは、精神分析の語らいが臨床的契約を支えるに留まらず、語らいが記述される形式をも供給することになるという事態のことである。これは、精神分析がかくも有効にまた目立たぬままに精神医学を遷移させて、精神医学のプロ

グラムに沿うように個人を規範化するという様相を批判しているのである。精神分析はこのようなやり方で、第一には組織の機能と分析家／精神科医の魔術的な力との同一化を促進することによって、また第二には組織の客観的な構造を解釈する排他的な手段として無意識の語らいをめぐる「心理社会学」を押し付けることによって、精神医学実践の力に対して、甚大な補強を提供しているのである (Gordon, 1977, p. 122)。

おそらくここで、なぜカステルが精神分析の表向きの批判者としてのドゥルーズとガタリ (Deleuze and Guattari) に惹きつけられるのがわかると思われるかもしれない。しかし我々が注意しなければならないのは、カステルがここで、ドゥルーズやガタリが精神分析を救済しているのではないかと気にしているということであり、議論はここで、エディプスコンプレックスに与えられる特権性を軸にして動いているのである (Gordon, 1977, p. 126)。このように言っているのかどうかはともかく、精神分析の語らいもまた適応の中に内包されてしまわないとも限らないものであって、それこそがラカンが、エディプスに与えられる特権を含めた精神分析の語らいは、解きほぐすこともまた可能なものなのだというを示すために、あれほどの労力を払った理由なのである。

経営 Management

適応の問題をこのくらいにしてそろそろ経営の問題に移りたいと思う。学術的な分野ごとの枠組みは、精神分析がそのような質のものとして立てられている場合も含めてであるが、

自分自身が発見したと主張するものを裏付ける役割に回ってしまうという危険を負うことになる。そして、経営学ほどにそのような危険が高い分野もないであろう。というのも、経営学は、次のようなものの存在に依拠して打ち立てられているからである。すなわち「まるで奇跡のように自分自身の意図と調和しつつ行動する、合理的で非性的で、しかも良識ある自己」(Cederström, 2009, p. 16) と言わなければならない。このような、驕の行き届いた個別的な主体モデルの強化を図ろうとする動きに対抗して、「批判的経営研究 Critical Management Studies (CMS)」が出現して、一九九〇年代の初めには次第にひとつの下部領域として認められ形を取るようになってきた (Alvesson and Willmott, 1992)。そして CMS の中のマルクス、ウェバー、ミシェル・フーコーといった人々についての理論的討論を下地として、ビジネスや経営の学部の中に、新たな下部・下部・領域が力を蓄えるようになった。それがいわゆる「経営学ラカニアン」たちである。

この CMS の下部・下部・領域における初期の論文(たとえば Roberts, 2005; Harding, 2007) は、ラカンの鏡像段階に関する記述 (1949) に依拠して、被雇用者たちが「統合の像に自らを同一化させることによって、経営側の統制に対してさらに脆弱になってしまった」(Cederström, 2009, p. 23) ということを示し、また、より楽観的には、「主体は異なる状況の中で異なるアイデンティティを身に着ける」(ibid., p. 26) ということを示したりもした。経営学ラカニアンによるさらに近年の寄与としては、イデオロギーの覇権の理論

に沿って同一化の過程を記述したり、被雇用者が自分の仕事に打ち込むことを保証するような語らいの構築の多様性を記述したりするようになっていく（Contu and Willmott, 2006）。またこのようにして、「ファンタジーはアイデンティティをさらに疊惑的で優美なものにするが、それはまたいつと同じ状態、つまり安定と持続性の経験を維持する」（Cederström, 2009, p. 27）ということを示したりもしているのである。

現在のところ、ラカンによる光を巧みに屈折させて取り入れている仕事には、エルネスト・ラク라우とジャンタル・ムフェ（2001）のものやスラヴォイ・ジジエク（1989）のものがあり、これらの仕事は、享楽の不可能なる核が、アイデンティティの魅惑の座として働いている（Jones and Spicer, 2005）のだということに興味を集中させている。また、享楽とは、ラカン（1958・1959: 15 April 1959）が『セミネール第六巻』において「欲求の直接満足」と表現したような道を越え出た何ものであるのだが、違反行為もまた経営の機能の一環となっていて、享楽は許可を与えられ、手なずけられてしまう。CMSにおける「労働におけるラカン」の理論的な進展は、ファンタジーの明確化を促進して、それによって、イデオロギーが主体をわしづかみにしている状態の分析を深く行えるようになってきた。影響力のある説明のひとつは、ラカンが『セミネール第六巻』で精錬していた語らいの諸形態に対応して行われたものであり、次のように論じている。「ファンタズムの語りに備わる論理は、理想とか、理想

の実現を妨害するものとか、さらには理想を通した違反行為に結びついた享楽と共に、主体の欲望を提示することによって、それを構造化するような種類のものである」（Glynos, 2010, pp. 29 - 30）。

これははっきりと、政治経済学におけるイデオロギーとファンタジーの本質をめぐる、より広範囲なプロジェクトの一部をなすものであり（Glynos, 2001, 2012）、次のような前提に依拠している。すなわち、「政治の論理が我々に、社会的実践がどのように実現にもたらされ、形を変えてゆくのかを示す手立てを提供するとすれば、ファンタジーの論理は、個別の実践と枠組みが、主体をイデオロギー的に掴み取ってしまう様子を曝露してしまうものである」（Glynos, 2010, p. 31）。CMSの中でも、疎外的で破壊的なものとしての現在の労働の状況への批判が、伝統的な経営学の見直しの範囲を拡大させてきている（Cederström and Fleming, 2012）。パリにおける「労働におけるラカン」を再考するための国際会議」での二〇一三年のある発表は、CMSの経営学ラカニアン聴衆を捉えたが、それは包み込み可能な享楽の方途を提供するものであった（Cederström and Hoedemakers, 2013）。発表と討論は、アレクサンドラ・ミッチェル（2011）の優れた論文をめぐってなされた。その論文は「超越する社会化：組織による統制における身体役割と知識労働者の変容に関する九年間に亘る民族誌」と題されており、評価の高い主流派の雑誌、アドミニストラティブ・サイエンス・クォーターリーにおいて公刊されたものである。この論文の出発点

は「自律のパラドックス」(Mazmanian et al., 2011)と名付けられているものである。これは「知識労働者たちは、自分たちの努力を、それが組織による統制のもとにあるということが自明であるにもかかわらず、自律的であると感じる」(Michel, 2011, p. 325)と、いうことを意味する。ミツチエルは、「妥当性を担保するために三角化した」ウォール・ストリートの二つの投資銀行での驚くべき量の民族誌的データと面接記録 (ibid., p. 334) — 七千時間の観察、六百回の正式な半構造化面接、二百回の非正式な面接、そして会社に関わるデータの分析 — に基づいて、「データと理論化の間を繰り返し行き来した。」そして、「見えにくい実質的な統制が、精神の頭越しに身体を狙ってくる」ということを示したのである (ibid., p. 335)。

「〈労働におけるラカン〉を再考するための国際会議」の聴衆たちは、銀行員たちがこき使われて、多くの場合に結局自分の身体を壊してしまふ、つまり睡眠剥奪の体制の中でコカイン使用に走ったり薬物処方に頼ったりして、障害をもたらず病気にかかり、燃え尽きて倒れるありさまに、釘付けになって聞き入った。このプロセスは、仕事に入ってからあつう四年目くらいで目に立つようになってくる。こうしたことを語る銀行員たちは口々に、「そういうふうに通制されていたかというところというわけではなくて、むしろ自分の身体と戦っている状態ですね」(p. 326)などと説明するのである。そして「この身体のせいで自分の人生が台無しになるなんていやですから」(p. 345)とか「ひとつ蹴りを入れてやれば、私の

身体はちゃんと動きだすんですわ」(p. 350)とか言ったりするのである。この論文は実際、何らかの意味で資本主義に批判的な気持ちをもつ人にとっては満足のゆく解釈を与えている。ただ、司会者たちは、ミツチエルが実際には、少なくとも何人かの銀行員たちが、自分たちの敵意を、以前は軽蔑していた弥縫的な自己解決策によって乗り越えてしまつて、「そのようにして銀行は、銀行員たちの超越的社会化と統制から利益を得ることになる」ということに關して、許容するような語りを供給していることについては口を噤んでしまったようである。自分自身の身体をあたかも拮抗者のようであるかのように扱う人々の遂行能力という問題は残されていたのであるが、ミツチエルの表現によれば、「身体を主体のように」扱う人々の遂行能力は向上して、彼らは、葛藤を乗り越えたように見えることになった。「彼らは、銀行の要求と自分の身体を要求を和解させなければならなかったが、それゆえに創造的であり得たのである」(Michel 2011, p. 350)。

ミツチエルの論文の多くの興味深い点の中で、私が注意しておきたいと思うのは、「理論」に対して「方法」がどのような関係にあるかということである。また、主流の経営学雑誌のための研究の枠組みの中では、ある種の定まった学術団体的な要請が繰り返されるということにも。そうした主流雑誌はふつう計量的研究を載せており、「批判」理論は言うに及ばず、理論というものを取り払って話を進めてゆくものである。ミツチエルは、自分の方法の提示を、データの「三角化」に言及しながら行っている。この方法は、研究の妥当性

を読者に対して保証すべく工夫されたものであって、資料に何らかの意味を与えるのに必要な「理論」を、「方法」それ自体に従属させることによって作られている。この著者は、「グラウンディッド・セオリー」(Glaser and Strauss, 1967)と呼ばれるものを用いたと述べることで、これを行っている。これは、データから、そしてデータのみから、仮説を構築することができると主張する方法論的アプローチである。この方向性は、「被雇用者は、自律性を誤って経験している」(Michel, 2011, p. 329) という逆説に光を当てはするが、それを解決することはない。しかもミッチェルは、「単調な労働は、感じ取られないような仕方、生命力を枯渇させ、身体を麻痺させる」(Michel, 2011, p. 331) ということに気づいていながら、また、この枠組みを保証するためにマルクス (1867) や感情労働についてのフェミニスト研究 (Hochschild, 1983) に言及しさえしながらも、彼女は実際の分析を、CMS や経営学のラカンの解釈からは、封をして巧みに隠してしまうので、このラカンの解釈のほうはあたかも内側からのメタ言語であるかのようにして、被膜のところで機能せざるを得なくなっている。

身体を、操作される対象として扱われ、象徴的に捉えられもする現実的なものとして記述してゆくことは、当然のことながら、精神分析研究者にとっては、ファンタジーや、対象との関係における主体の位置に関するいろいろな問題を浮かび上がらせる。ラカンは、『セミネール第六巻』において、身体の各部分は語らいの中で動員されるので、そうすると身

体というのは、周りで起こっていることに対して目に見える接近法を提供してくれているように見えるのではあるが、まさにその時にこそ身体自身がどのような機能を果たしているのが隠蔽されるような具合になっているのだということを強調する。すなわち、「我々自身の四肢（＝仲間たち）」をもって―それこそが想像界と言われるものだが―我々は無意識であるところのこの語らいのアルファベットを作り上げているのです」(Lacan, 1958-1959: 18 March 1959)。我々の身体をめぐるこの想像界の組織化、すなわち現実界を首尾一貫した語りへと変える組織化は、象徴界についてもやはり当てはまる。上記の研究へのある参加者は、銀行が無料のレンタカーとか食事とかフィットネスクラブとかドライクリーニングの手配をしてくれたりすることに言及しつつ、次のようにコメントした。「フェミニストたちはよく、妻が家の雑事をしてくれたら、すべての女性が働くことができるのだ、と言ったものでした。銀行は私の妻の妻です」(Lacan, 1958-1959: 18 March 1959)。この参加者がもし『セミネール第六巻』においてラカン (Lacan, 1958-1959: 8 April 1959) の言う「大文字の他者の大文字の他者は無い」という大きな秘密を知ったら、どのように言うことになるだろうか？ここでの教訓は、被雇用者たちには遅ればせにしか認められないような、「組織による統制」がいろいろな形でこの人の現実界の身体にかかっているということそのものではなくて、むしろ、ミッチェルが接近し、そこから彼女の「グラウンディッド・セオリー」を組み上げた経験的で想像的な領域と、

構造の顕現、すなわち現実界として理論的にしか把握できない象徴的な諸過程との間には、必然的な亀裂があるということである。

ラカンは、他者の領野における欲望の迫る道を、力という問題をめぐって論じている。エラ・シャープに分析を受けているときに小さい咳をした男性は、あらゆる力を備えた他者の領野に自分をどのようにして書き込んだのか、ということ、あるいはハムレットはどのようにして、自分の敵対者に抗して行動する力を奮い起こすことができたのか、といった問題である。力に対して従属しているこれらの人物像は、『セミネル第六巻』で幾度か、実際の臨床例であるかのように扱われている。それはあたかも、ハムレットはそのようなものとして扱ってはならないというラカン自身の警告に反しているような具合である。しかし彼らはまた、主体の「表象」でもあるのであって、彼らについて書かれたものを読む読者からの同一化を蒙る者たちでもあるのだ。このように考えるのは、ラカン自身がハムレットについて指摘した論点の一つであり、また同時に、他の臨床例についても当てはまることなのである。

『セミネル第六巻』の最終章においてラカン (1958-1959: 1 July 1959) が述べるところによれば、欲望とは、「(シニフィアンの連鎖の) 繋がりと関連で、主体がどのような道程を辿ったかということなのであり、欲望は他者の次元においてそこに映し出されるのである。」政治と言われているもの、それは他者の次元における力の組織化、すなわち、

現勢的に存在している象徴的領野の組織化、かつまた主体が自分自身の個別的な欲望の枠組みの範囲で、その領野に対して持っている関係のことではないのだろうか？ たとえその関係が、主体にとつては他者に全能性を賦与して自分自身の主体性をそこに隷属させることを享受することになるとしてもである。

欲望の組織化と、個々人との臨床的な仕事にとつてのその重要性についての考察において、ラカンはまた、欲望が我々を何らかの組織化の形式の中に閉じ込める仕方に応じて、力というもの、形を変えるのだという点についても、何がしかのことを我々に示してくれている。今日における欲望は、解釈の意匠としての精神分析への欲望も含んでいる。この意匠によって強迫的な主体は、他者の時間の中で己の実存を組織化するときに力をもらい、また、時間のない、倒錯した、映画の予告編のようなものであるファンタジーによって、自らを慰めるのである。それらは、ラカンの表現によれば (Lacan, 1958-1959: 17 June 1959) 、決して実際には存在するようにはならないものの「予告編」なのである。

私はここまで、主体性というものの広い意味における経営学にとつて、これらの論点がどのような意味をもっているのかを示そうとしてきた。そしてまた、欲望の組織化についてのラカンの議論が、組織にとつて欲望とは何かというこの理解や、いわゆる批判的経営学研究において欲望が占める位置の理解にとつて、有益なものであるということも示そうとしてきた。精神分析は、それ自体として、今日の我々の主体

性とは何かということを我々が省察するための、経験のフレームの一つである。そのようなものとして、精神分析は、歴史特異的な、主体の概念的カプセルとしても名付け得るものとして作動してくれる (Parker, 2011)。また、精神分析は同時に、我々がまさにその主体性をほどこす方法でもある。それは我々があの概念たちの布置から抜け出して入り込むことのできる、秩序に抗する窪みのような介入である。そこで我々は、我々自身を組織化し、解釈し欲望する別の道筋のあるもう一つの世界の可能性を、開かれたままに保つことが出来る。

文献

- Althusser, L. (1970) Ideology and Ideological State Apparatuses (notes towards an investigation) . In: L. Althusser (1971) *Lenin and Philosophy, and Other Essays*. London: New Left Books: 17 - 34.
- Alvesson, M. and Willmott, H. (1992) On the Idea of Emancipation in Management and Organization Studies. *Academy of Management Review* 17 (3) : 432 - 465.
- Badiou, A. (2007) Theory from Structure to Subject: An interview with Alain Badiou. In: P. Hallward and K. Peden (eds.) (2012) *Concept and Form Volume 2, Selections from Cahiers pour l'Analyse*. London: Verso, pp. 273 - 290.
- Castel, R. (1973) *Le Psychanalyse: L'ordre psychanalytique et le pouvoir*. Paris: Maspéro.
- Cederström, C. (2009) Lacan goes business. *Annual Review of Critical Psychology* 7: 16 - 32.
- Cederström, C. and Fleming, P. (2012) *Dead Man Working*. London: Zero Books.
- Cederström, C. and Hoedemakers, C. (2013) When work doesn't stop. Paper presented at the Re-working Lacan at Work International Conference, ESCP Europe Paris Campus; June, Paris, France.
- Contu, A. and Willmott, H. (2006) Studying Practice: Situating *Talking About Machines. Organization Studies*, 27 (12) : 1769 - 1782.
- Deleuze, G. and Guattari, F. (1977) *Anti Oedipus: Capitalism and Schizophrenia*. New York: Viking. (『アンチ・オディピスー資本主義と分裂症』市倉宏祐訳、河出書房新社、一九八六年)
- Driver, M. (2013) 'The Lack of Power or the Power of Lack in Leadership as a Discursively Constructed Identity', *Organization Studies*, 34 (3) : 407-422.
- Floury, N. (2010) *Le Réel Insensé: Introduction à la Pensée de Jacques-Alain Miller*. Paris: Editions Gemina.
- Foraki, M., Long, S. and Schwartz, H. S. (2012) 'What Can Psychoanalysis Offer Organization Studies Today? Taking Stock of Current Developments and Thinking about Future Directions', *Organization Studies*, 33 (9) 1105 - 1120.
- Freud, A. (1936) *The Ego and the Mechanisms of Defence*. London: The Hogarth Press. (アンナ・フロイト『自我と防衛』外林大作訳、誠信書房、一九五八年)
- Freud, S. (1900, 1963) The Interpretation of Dreams (First Part). Standard Edition 4. London: Hogarth Press, pp. 1-338. (フロイト

『夢解釈・Ⅰ』新宮一成訳、岩波書店、二〇〇七年

Glaser, B. and Strauss, A. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New York: Aldine.

Glover, E. (1956) *Selected Papers on Psychoanalysis Volume I: On the Early Development of Mind*. New York: International Universities Press.

Glynn, J. (2001) The grip of ideology: a Lacanian approach to the theory of ideology. *Journal of Political Ideologies* 6 (2) : 191 - 214.

Glynn, J. (2010) Lacan at work. In: C. Cederström and C. Hoedemaekers (eds.) *Lacan and Organization*. London: MayFlyBooks, pp. 13 - 58.

Glynn, J. (2012) *The Place of Fantasy in a Critical Political Economy: The Case of Market Boundaries*. *Cardozo Law Review* 33 (6) : 101 - 139.

Gordon, C. (1977) The unconscious of psychoanalysis. *Ideology & Consciousness* 2: 109 - 127.

Guéguen, P.-G. (2007) Women and the symptom: The case of the post-Freudians. In: V. Voruz and B. Wolf (eds.) *The Later Lacan: An Introduction*. New York: SUNY Press, pp. 242 - 258.

Hallward, P. (2012) Introduction: Theoretical Training. In: P. Hallward and K. Peden (eds.) *Concept and Form Volume 1, Selections from Cahiers pour l'Analyse*. London: Verso, pp. 1 - 55.

Harding, N. (2007) Essai: On Lacan and the Becoming-ness of Organization/Selves. *Organization Studies* 28 (11) : 1761 - 1773.

Human Feeling. Berkeley, CA: University of California Press.

Jones, C. and Spicer, A. (2005) The Sublime Object of Entrepreneurship. *Organization* 12 (2) : 223 - 246.

Klein, M. (1986) *The Selected Melanie Klein* (edited by J. Mitchell). Harmondsworth: Penguin.

Lacan, J. (1946) Logical time and the assertion of anticipated certainty: A new sophism. In: J. Lacan (2006) *Écrits: The First Complete Edition in English*. Translated with notes by B. Fink in collaboration with H. Fink and R. Grigg. New York: Norton. (トカノ「論理的時間」予期やれる確実性の断言)『エクリ』一、佐々木孝次他訳、弘文堂、一九七二年)

Lacan, J. (1949) The Mirror Stage as Formative of the I / Function as Revealed in Psychoanalytic Experience. In: J. Lacan (2006) *Écrits: The First Complete Edition in English*. Translated with notes by B. Fink in collaboration with H. Fink and R. Grigg. New York: Norton. (トカノ「わたし」の機能を形成するもののこころの鏡像段階)『エクリ』一、宮本忠雄訳、弘文堂、一九七二年)

Lacan, J. (1956-1957) *La relation d'objet*, <http://www.valas.fr/Jacques-Lacan-La-relation-d-objet-1956-1957>, 268, accessed 1 October 2014. (「対象関係」小出浩之他訳、岩波書店、二〇〇七年)

Lacan, J. (1957 - 1958) *The Seminar of Jacques Lacan Book V: The Formations of the Unconscious*, translated by C. Gallagher from unedited French manuscripts, <http://www.lacaninireland.com/web/published-works/seminars/>, accessed 1 October 2014. (『無意識の形成物』佐々木孝次他訳、岩波書店、二〇〇五年)

- Lacan, J. (1958) The direction of the treatment and the principles of its power. In: (2006) *Écrits: The First Complete Edition in English*. Translated with notes by Bruce Fink in collaboration with Heloise Fink and Russell Grigg. New York: W. W. Norton & Co. (「ラカン」治療の指導とその能力の諸原則)『エクリ』Ⅲ 海老原英彦訳、弘文堂、一九八一年)
- Lacan, J. (1958 - 1959) *The Seminar of Jacques Lacan Book VI, Desire and its Interpretation*, translated by C. Gallagher from unedited French manuscripts, <http://www.lacanireland.com/web/published-works/seminars/>, accessed 1 October 2014.
- Lacan, J. (1964, 1967) Founding act. *October*, 40 : 96 - 105.
- Lacan, J. (1986, 1992) *The Ethics of Psychoanalysis 1959 - 1960 : The Seminar of Jacques Lacan Book VII* (translated with notes by Dennis Porter) . London: Routledge. (『精神分析の倫理』上・下、今出浩之他訳、岩波書店、一九八六年)
- Lacan, J. (1977) Desire and the interpretation of desire in *Hamlet*. *Yale French Studies*, 55/56: 11-52.
- Lacan, J. (1991/2007) *The Other Side of Psychoanalysis: The Seminar of Jacques Lacan, Book XVII* (translated by R. Grigg) . New York: Norton.
- Lacan, J. (2006) *Écrits: The First Complete Edition in English*. Translated with notes by B. Fink in collaboration with H. Fink and R. Grigg. New York: Norton. (「ラカン」エクリ)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、宮本忠雄・佐々木孝次他訳、弘文堂、一九七二―一九八一年)
- Lacan, J. (2013) *Le séminaire livre VI, Le désir et son interprétation, 1958 - 1959*. Paris: Éditions de La Martinière/Le Champ Freudian.
- Lacian, E. and Mouffe, C. (2001) *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics (2nd Edition)* . London: Verso. (『民主主義の革命―ケネディとポストモダリス主義』やべつ字書文庫、2012)
- Loewenthal, D. and Samuels, A. (eds.) (2014) *Relational Psychotherapy, Psychoanalysis and Counselling: Appraisals and reappraisals*. Abingdon/New York: Routledge.
- Marini, M. (1992) *Jacques Lacan: The French Context*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press. (「ブローニ」「ハンマン・ラカン」榎本謙訳、新曜社、一九八九年)
- Marx, K. (1867, 2010) *Capital: A Critique of Political Economy*, <https://www.marxists.org/archive/marx/works/1867-c1/>, accessed 1 October 2014. (「バレンス」「資本論」向坂逸郎訳、岩波文庫、一九九五年)
- Mazmanian, M., Orlowski, W. and Yates, J. (2011) The autonomy paradox: The implications of wireless email devices for knowledge professionals. working paper no. 4884-11. MIT: Sloan School of Management.
- Michel, A. (2011) Transcending socialization: A nine-year ethnography of the body's role in organizational control and knowledge worker transformation. *Administrative Science Quarterly* 54 : 1 - 44.
- Parker, I. (2011) *Lacanian Psychoanalysis: Revolutions in Subjectivity*. London: Routledge.
- Rabaté, J.-M. (2001) *Jacques Lacan: Psychoanalysis and the Subject of Literature*. London: Palgrave.
- Rancière, J. (1974/2011) *Althusser's Lesson*. New York: Continuum.

- Roberts, J. (2005) The Power of the 'Imaginary' in Disciplinary Processes. *Organization* 12 (5) : 619 - 642.
- Roudinesco, E. (1990) *Jacques Lacan and Co.: A History of Psycho-Analysis in France 1925-1985*. London: Free Association Books.
- Sharpe, E. (1937) *Dream Analysis: A Practical Handbook for Psycho-Analysis*. London: The Hogarth Press.
- Shingu, K. (2004) *Being Irrational: Lacan, the Object a, and the Golden Mean* (translated and edited by M. Radich, originally published 1995) . Tokyo: Gakujū Shoin, Tokyo. (『ラカンの精神分析』講談社 一九九五年)
- White, J. (2006) *Generation: Preoccupations and Conflicts in Contemporary Psychoanalysis*. London and New York: Routledge.
- Žižek, S. (1989) *The Sublime Object of Ideology*. London: Verso. (『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳 河出書房新社 二〇〇一年)